

# 大学の教育的環境の継時的研究

—1977年から1979年における北星学園大学の  
教育的環境について—

土 橋 信 男

## I. は じ め に

わが国の大学進学率は経済の高度成長とともに1960年代の後半から急速に増えつづけてきたが、1970年代後半から国が高等教育に関する拡大の規制をはじめたことによりその上昇は抑制されはじめた。しかし、1978年度における大学および短期大学への進学率は38.4%に達している。さらにこれに大学・短期大学以外の高等教育機関（高校新卒者の専修学校、大学の通信教育課程など）の入学までも含めた広い意味での高等教育機関への進学率は50.8%（文部省学校基本調査）にもなっておりこれは新制度の高等教育が国民のために開かれた結果であるといつてよいであろう。

高等教育の大衆化の結果第一に生ずる現象は高等教育機関へ入学する学生の質が変化することであり、それに応じて受け入れ側でも教育のありかたを変える必要が生じてくる。したがって大学は常にどのような学生が在学しているのかを知っていなければならない。しかし一方でどんなに大衆化しても、大学は大学であろうとする限り変らぬ基本的性格を持ちつづければならぬであろう。その一つは、大学における教育方法であり、それは基本的には学生の自主的な学習を中心とするということではないかと思う。これはきわめて自明なことのようと思われるが実態としては必ずしもそうではないようである。多くの場合に学生は自主的にはおろか、最少限の課題すらも果さぬからである。この点すなわち大学は大衆化した入学者にどのような教育プログラムを提供するか、またどのように学習をさせるかという点において今日の大学は充分な対

応をなしえていないために大学教育が成功していない場合が多いのではなからうか。

さて、大学における教育の過程が学生の自主的な学習にあるとするならば大学教育を成功に導びぐ一つのかぎは自主的な学習をひきおこさせることであろう。そのためには学生自身の心がまえ、やる気は勿論のこと、教師の姿勢や指導方法も重要であろうが、大学行政的見地<sup>(1)</sup>からは学生の自主的な学習をひきおこさせるようなさまざまな教育的環境をととのえることがきわめて重要な課題としてとらえられなければならないであろう。

大学環境の研究の端緒は、1950年代の米国で生じた。すなわちコフカ (Koffka, K.) のゲシュタルト心理学やルウィン (Lewin, K.) の場の理論、さらにマレー (Murray, H. A.) の環境と人格の理論などを基礎として、大学環境が学生にどう関わるかを研究するいわゆる環境研究 (Environmental Study) が社会心理学者たちにより行なわれるようになったからである<sup>(2)</sup>。まずスターン (Stern, G. G.) は、はじめにペイス (Pace, R.) とともに大学環境の測定検査票を作成したが<sup>(3)</sup>、後になり二人は別々に環境調査票を作成していった。すなわちスターンはマレーのニード・プレス (need-press) 理論のモデルを適用してニードに対しては行動検査票 (Activities Index) を、プレスに対しては大学特性検査票 (College Characteristics Index) を作成し、それらの二つにより大学環境とそこにおける個人 (学生) の関係が明らかにされるとして1969年までに約100大学の約10,000人の学生を対象にして同検査を実施してその成果を1970年に報告した<sup>(4)</sup>。一方ペイスはスターンの大学特性検査票を基礎としながらも、これとは異なる理論的立場から大学環境検査票 (College and University Environmental Scales, 以下 CUES と称する) を1963年に作成し、1965年に100大学の15,395人の学生を対象に検査を実施し、その結果を用いて標準化したことを報告している<sup>(5)</sup>。大学環境研究の先駆者となったこの二人の方法に共通していることは、基本的には大学環境をそこに在学している学生の認知 (perception) を通して定義づけていることである。

さて、スターンもペイスもこれらの検査の実施の結果大学環境に関す

るいくつかの共通した現象を見出している。第一に大学はそれぞれ固有の特色をもつ環境を有しているということである。したがって各大学は逆にそれらの環境類型から分類することが可能になる。

次にその大学に関する認知は学部や学科、学年や性別、住居地域のちがいが等には左右されないで、同じ大学にいるものにとってはきわめて共通した環境として認められているということである。第三に、入学直後の新入生は在學生（もしくは上級生）とは異なる認知をするということである。したがってペイスは入学後6カ月を経過しない学生は調査の対象にすべきではないといい、一方スターンは入学直後の新入生を対象とした調査結果は新入生の持っている大学への期待値としての意味があり、その期待値と在學生との間にある差をこそ問題にすべきだと主張している。

以上の二名の研究の他に、環境研究に関する代表的な研究としてはクラーク (Clark, B.) とトロウ (Trow, M.) の二人またはニューカム (Newcomb, T.) による副文化 (subculture) モデル理論<sup>(6)</sup>、ホランド (Holland, J. L.) による環境評価法 (Environmental Assessment Technique)<sup>(7)</sup>、パーヴィン (Pervin, L. A.) のトランザクション理論 (Transactional Approach)<sup>(8)</sup> などがあるが、それらについては項を別にしてふれたい。

さて、わが国においては環境研究は1970年代に至るまでほとんど行なわれなかったといつてよいであろう。たまたま CUES が立教大学の平木典子氏により1968年に紹介され、日本版 CUES が1969年から作成されはじめ、数回の子備テストを経て1972年に100項目からなるテスト用紙が完成し、第1回めの調査を立教大学学生に対し1972年末から1973年はじめにかけて実施したのが最初のものであろう<sup>(9)</sup>。以後立教大学では1974年、1975年、および1977年に全学を対象に調査が行なわれている<sup>(10)</sup>。他の大学としては1977年に関西学院大学が CUES を他の調査と併用して実施したことが報告されている<sup>(11)</sup>。

立教版 CUES はペイスの CUES にもとづきつくられており、大学におけるさまざまな状況(環境)を100項目の叙述であらわしたもので、回答者(その環境内にある学生)がそれらをどううけとめているかを、

叙述に対する肯定か否定かにより答える形式の検査票である<sup>(12)</sup>。(叙述文の全文は第4表に示されている。)ペイスはこれらの100項目を因子分析からみちびかれた5つの因子に分けて得点が計算できるように作成したが、立教版も、それに従ってつくられている。それら5つの因子は領域(ペイスにおいてはスケール・SCALE)とよばれ、それぞれ実用性、(Practicality)、学究性(Scholarship)、共同性(Community)、妥当性(Propriety)、意識性(Awareness)という名称がつけられ、各20項目により構成されている。各領域の構成項目および内容は次の通りである。

実用性(項目1~10, 51~60): 大学の実際的・機能的側面がどのように整っているかをみる。大学におけるコミュニケーション、学生援助プログラム、設備、施設、さまざまな機会が与えられているかなどに関する設問が主になっている。

学究性(項目11~20, 61~70): いわゆる教学に関する側面であり、学内における学究的雰囲気や、学問的意欲、学問への関心、知的関心、研究や勉学へのとりくみかたなどに関する設問が主である。

共同性(項目21~30, 71~80): 共同体としての意識や実体が存在しているかを問う項目で、共同体意識に関連する親睦、人間関係、グループ意識、機会などに関する設問が主になっている。

妥当性(項目31~40, 81~90): ここで問われているのは、大学としてふさわしい節度と規律であり、具体的には個人ならびに団体が規則を守って行動しているか、他の人に対する配慮があるかなどという設問が主になっている。

意識性(項目41~50, 91~100): 個と社会に関してその存在と存続の意味を問う領域で、自己の意味への探究、政治的関心、創造的、芸術的関心などに関する設問が主になっている。

ペイスによれば教育的環境とは学科目、教授、図書、試験、講義、規則、課外活動、施設設備、学生の態度や期待など多くの基礎的な要素により成りたっているが、それらを大きく分類すれば以上の5つの領域に分けることができ、それにより大学の特徴を簡潔に表現できるというのである。ペイスは1965年度に行なった100大学の調査で、8類型の大学

## 大学の教育的環境の継時的研究

(入学の難しいリベラル・アーツ大学および総合大学、平均的なリベラル・アーツ大学および総合大学、州立大学、教員養成大学、キリスト教主義大学、工科大学)から各10もしくは20大学を選んだが、それらの大学群は、5つのスケールにより実にもごとにそれぞれの特色が表現されたと報告している<sup>(13)</sup>。たとえば実用性においては、教員養成大学や、工科大学がもっとも高く、リベラルアーツ大学は低い。学究性においてはまったくその逆になっている。また妥当性や、共同性においてはキリスト教主義大学が卓越している。またリベラル・アーツ大学は意識性においてきわめて高い値を示しているなど。

さて、わが国における調査は前述のようにこれまで二大学においてしか行なわれていないため、ペイスの場合のような大学間の特徴を類型づけることはできないが、大学間における比較は可能である。前述の立教大学の結果からは、同大学の環境は共同性においてももっとも高く、次に妥当性がこれにつづいている。意識性や実用性はこれよりやや低くなっているが、最も低いのは学究性であり、自ら「高校も首を傾げる学究性」<sup>(14)</sup>と批判しているほどである。(第6表に立教大学の1972年から、1977年までの領域得点の結果と、関西学院大学の1976年度の結果が記載されている。) 関西学院大学の結果も立教大学ときわめて共通しているが、ただ実用性は立教大学の場合よりかなり高い数値を示している。

さて筆者はかつてシラキュース大学においてストーン博士に指導をうけたので、わが国において、AI, CCIによる環境研究を実施する必要があると感じていたのであるが、立教大学版 CUES の存在を知ったので、むしろ比較検討のできる CUES を用いることの利点を感じて本研究を実施した。

## II. 本研究の目的と調査の経過

本研究の目的は立教大学版の CUES を用いてキリスト教主義の一地方私立大学である北星学園大学の教育的環境について次の諸点を明らかにすることである。

1. 北星学園大学の教育的環境の特性はどのようなものか。

2. 先行研究で明らかにされた立教大学および関西学院大学の教育的環境と比較してどのようなちがいがあるのか。
  3. 米国におけるのと同様に学年間、学科間、性別等による環境の認知に差はないか。
  4. 入学直後の学生の大学への期待値と在大学生どの認知との差はどの程度、どのようにあるのか。
  5. 1978年度と1979年度とでは大学の教育的環境は変わったか。
- これらの問題を明らかにするために CUES を1977年12月から1979年4月にかけて本学の教職課程履習者を対象に集団法により5回にわたり実施した結果867の標本を得ることができた。CUES の実施時期とそれぞれの回収標本数は第1表の通りである。

第1表 CUES実施時期と回収標本数

実施時期	回収標本数	対 象
1. 1977年12月	58	4年生(大学在学4年間)
2. 1978年1月	130	主として1年生(大学在学1年間)
3. 1978年4月	227	主として新入生(大学在学期間無し)
4. 1979年4月10日	249	主として新入生(同上)
5. 1979年4月12日	198	主として2年生(大学在学1年間)
回収標本総数	867	

これらの標本は何回か異なる時期に回収されたが、12月から4月までの期間については冬期及び春期休暇等の存在から大学環境に特別な変化が生じないかぎり(実際にこの年度においては生じていない)時間的差によるちがいは無視できると仮定して、1977年12月から1978年4月までの1978年4月新入生を除く標本を一括して1978年度当初における大学環境をあらわす標本とした。また1978年度4月の新入生の標本は新入生の大学環境への期待値としてとりあつがうことにした。したがって1978年1月の標本については学年を1年ずつ加え、また1977年12月の調査対象となった4年生についてはそのまま4年生としてとりあつがうこととした。

1979年4月回収の標本については2年生以上が1979年度当初の大学環

大学の教育的環境の継時的研究

境をあらわす標本とし、新入生は大学への期待値をあらわす標本としてとりあつかった。このようにして全標本を基本的には1978学年度初期および1979学年度初期の大学環境の CUES による測定値（上級生）および期待値（新入生）をあらわす二群において処理をした。なお、1979年度における上級生のうち二年生は1978年度の標本を構成する新入生であるので、この調査は縦年的もしくは継時的調査であるといえよう。

こうして分けた二群の標本の学科および学年別の内訳が第2表および第3表に示されている。1978年度および1979年度における本科登録学生はそれぞれ1685名および1705名である。本研究の標本数の全学生との比は1978年度および1979年度において、新入生でそれぞれ53%、58%であり、2～4年生をふくめた上級生では両年とも16%である。

第2表 1978年度回収標本内訳

学 科	学 年					合 計
	1	2	3	4	NA	
英 文	66	32	1	37	1	137
社 会 福 祉	80	43	5	14	0	141
経 済	71	48	1	16	1	137
NA	0	2	0	0	2	4
合 計	217	125	7	67	4	419

第3表 1979年度回収標本内訳

学 科	学 年					合 計
	1	2	3	4	NA	
英 文	84	50	4	0	0	138
社 会 福 祉	68	57	9	5	0	139
経 済	86	37	10	2	2	137
NA	1	0	0	1	31	33
合 計	239	144	23	8	33	447

北 星 論 集 第17号

第 4 表 項目別全体回答状況一覧 (肯定回答の百分率)

項目 番号	質 問 項 目	1978		1979	
		新入生 N=217	上級生 N=198	新入生 N=239	上級生 N=175
1.	学内の出来事については、すぐ知ることができる。	23.5	40.4	50.6	52.0
2.	学内は、探逸や方向案内図等によってわかり易くなっている。	43.3	33.0	58.6	57.1
3.	学内は、この大学独特の雰囲気が高い。	53.0	42.9	72.0	55.4
4.	無難なクラブやグループにいる方が、社会的に受け入れられる。	47.5	49.8	53.1	49.7
5.	この大学は、より実用的・現実的教育を重んじている。	45.6	26.1	47.7	49.1
6.	成績優秀な学生には、特別に勉強奨励の機会が与えられる。	71.9	65.0	87.0	70.9
7.	学生は、リーダーシップ養成の機会に恵まれている。	55.3	19.2	54.0	32.6
8.	この大学は、学生が不満を申し立て易いようになっている。	65.0	44.3	66.9	48.6
9.	学内環境は、大学にふさわしく美しく便利に整っている。	24.0	11.3	69.9	34.9
10.	大学は、学生の能力や個性を生かす機会を与えている。	58.1	32.5	66.5	48.0
11.	学生の勉強意欲をかり立てるような教授方法を工夫し実行している教師は少ない。	58.1	78.3	46.9	49.7
12.	一生懸命に勉強しなくてもよい科目は簡単にパスできる。	12.9	34.0	9.6	33.1
13.	学生は、授業中させられるまではほとんど発言しない。	72.8	90.1	71.5	86.3
14.	教科書だけ勉強しておけば、ほとんどの試験に間に合う。	28.6	49.8	26.4	46.9
15.	学生は目標を高くおき、それにむかって努力している。	43.8	17.2	45.2	21.1
16.	教授は、学生の能力を十分引き出している。	22.6	5.9	27.6	17.7
17.	学生の間では、真剣な知的レベルの高い討論がよく行われている。	31.3	13.7	31.4	23.4
18.	学問のきびしさを教える教師は少ない。	42.4	73.9	31.0	65.1
19.	誰でも、単位をとり易い科目と、とりにくい科目を知っている。	38.7	67.5	49.8	72.0
20.	多くの教授は、積極的に研究にたずさわっている。	71.0	62.6	75.3	71.4
21.	学内には、うあべだけの表面的なつきあひが多い。	43.8	65.5	41.0	50.9
22.	学生は、バー、喫茶店や友人の部屋で時間をすごすことが多い。	58.5	60.1	46.9	50.3
23.	学生は、気軽によく貸し借りをしている。	74.2	85.7	75.7	87.4
24.	学生は、困った時はお互いに助け合う。	83.4	80.3	88.7	83.4
25.	多くの人は、自分の周囲の人に対して思いやりがある。	63.6	61.1	72.3	73.1
26.	多くの上級生は、新入生が学園生活に助けよう積極的に手助けをしている。	79.3	45.3	86.6	65.1
27.	この学校は、非常に親しみやすいという評判である。	50.2	35.5	67.4	58.3
28.	麻雀をしようと、映画を見に行くとかいうことで、仲間はずれ集まる。	59.9	60.6	67.8	73.1
29.	大学の行事に、多くの学生は積極的に協力する。	50.2	15.3	67.4	28.6
30.	自治会選挙は無関心な人が多い。	69.1	85.2	59.4	94.3
31.	学生団体は、社会ルールは勿論、大学の規則に従って活動している。	75.1	76.4	83.7	83.4
32.	学生が沉醉したり、乱暴したりするようなことはめったにない。	67.3	75.4	82.8	80.6
33.	いつも何かの役に立とうと思っている人は、やっかい者と思われる。	20.3	21.2	17.2	18.9
34.	学生は、大学の所有物を良心的に扱う。	53.9	45.3	72.4	60.0
35.	学生の出版物が個人攻撃をしたり、特定の団体の名誉を傷つようなことはしない。	69.1	73.9	77.4	79.4
36.	学生の規則違反は、普遍黙認されている。	34.1	44.3	34.7	32.0
37.	この大学では、目上の人には尊敬を払うべきだと思っている人が多い。	39.2	34.0	40.2	37.7
38.	学生は、音楽会や講演会で強ひたり身を入れて聞かないことがある。	45.2	35.0	47.7	40.0
39.	すべての学生は、大学に対して現住所を常にあきらかにしている。	80.6	77.3	92.5	81.7
40.	学生は、団体生活において、自分の健康管理を行なっている。	67.7	70.4	84.5	72.0
41.	学内ですぐれた科学者が来て講演しても聴衆は少ないだろう。	41.9	49.8	32.2	55.4
42.	大部分の学生は異なった考え方や専断をかなり冷静に客観的に判断している。	64.5	53.7	73.6	68.0
43.	学内のあちこちで議論している人連がいる。	26.3	30.5	30.1	25.1
44.	ここでは、自己の視野を広げるような機会がめったにない。	34.6	53.2	30.1	40.6
45.	学生の演劇、音楽、絵画等に対する関心は高い。	58.5	43.3	60.3	42.3
46.	学内で、すぐれた評論家が来て講演しても聴衆は少ないだろう。	36.9	40.4	31.8	44.6
47.	学生は、国内外の情勢に大いに関心を持っている。	57.6	35.5	60.3	38.3
48.	進歩的文化人の発言には、かなり関心がある。	62.7	54.2	66.1	62.9
49.	教授の中には、様々な話題の人物がいる。	70.5	66.0	82.8	76.0
50.	学内の人々は、困難にぶつかることによって成長していくようだ。骨が折れれば折れる程一生懸命になる。	55.3	43.3	67.4	49.7



大学の教育的環境の継時的研究

項目 番号	質 問 項 目	1978		1979	
		新入生 N=217	上級生 N=198	新入生 N=239	上級生 N=175
51.	コンパやダンスパーティー等の社交の機会が沢山ある。	80.2	54.2	88.3	61.7
52.	新しい流行や流行語が、たえず学生の間ではやっている。	62.2	61.1	59.6	61.1
53.	多くのカリキュラムでは、具体的に実的なものよりも、抽象的なものに重きが置かれてい	45.2	60.6	42.3	49.7
54.	多くの学生は自分の尊敬する人物のようになりたいとする。	44.2	28.1	44.4	33.1
55.	この大学では、実用的コースが設けられている。	53.0	34.5	72.0	52.6
56.	学生の代表は、公に認められた手続きにのっとって選挙されている。	74.7	21.8	84.9	84.6
57.	学生は、自分の計画・立案したことを最後まで責任をもってやりとげるよう教育	60.4	43.3	70.7	53.7
58.	学生に対して、病気の予防のために、保健指導が徹底している。	34.6	19.2	64.0	44.0
59.	キャンパスでは、多くの有名人が招かれ講演会・音楽会・学生討論会が開かれている。	14.3	9.4	20.1	10.9
60.	この大学には、特別な資料や立派な設備がある。	34.6	12.3	51.5	24.6
61.	教師の研究室をたずねて、議論をしたり、教問したりする学生が多い。	34.6	23.2	51.0	22.3
62.	ほとんどの科目では、持続的な勉強や予習が必要である。	81.1	46.8	86.2	60.0
63.	知的レベルの高い授業が多い。	58.5	29.1	68.2	49.1
64.	学生は勤勉であり、確固たる物学目標を持っている。	35.5	10.8	41.4	23.4
65.	この大学は、純粋な学問や基礎研究の面ですべての	43.8	33.5	64.4	49.7
66.	この大学では、入学すれば卒業は簡単である。	17.5	39.4	16.7	28.6
67.	この大学では、大学院に進学する者が少ない。	86.2	91.1	84.9	89.7
68.	ほとんどの学生は、授業でノートを書きとらんとしようとする。	65.4	44.8	77.0	55.4
69.	よい成績をとろうと努力する学生が多い。	61.8	47.3	69.9	65.1
70.	多くの学生は、自分の専攻を決めるにあたって、はっきりした目的を持っている。	53.0	27.6	66.1	53.1
71.	大学寮には、学内の雰囲気がいじり上る。	75.6	34.0	87.0	60.0
72.	学生主催の行事や講演は、みんなの話題になる。	52.1	24.1	64.4	40.0
73.	学内では、仲間意識が高い。	64.1	52.7	77.0	73.7
74.	ほとんどの教授は、学生の個人的な問題に興味がない。	60.4	70.4	50.6	62.9
75.	お互によく知り合えるような機会が多くある。	48.4	23.6	63.2	41.1
76.	教職員に対して、学生は親近感を持っている。	39.2	26.1	54.4	49.1
77.	多くの学生は、卒業してからとも同様の形で、大学とつながりを持ちたいと思っ	43.8	33.5	47.7	41.7
78.	クラブ活動は、大学にとって必要不可欠なものである。	64.5	87.0	71.1	68.6
79.	この大学の社会的評判はとても気になる。	66.4	67.0	69.5	71.4
80.	この大学の個性を誰もが感じている。	47.5	28.1	69.0	57.1
81.	学生は、団体として行動する場合は、大学に助けられている。	58.1	69.5	80.3	68.0
82.	学生は、自由奔放な態度で教授を戸惑わせている。	21.7	25.6	21.8	26.3
83.	学生は、時々とつびな行動をしたり反抗したりする。	43.3	28.6	26.4	24.6
84.	学生は、規則などあまり気にかけていない。	60.4	67.0	52.3	61.1
85.	学内で、学生のはめをはずした行動は考えられない。	50.7	67.0	63.6	66.3
86.	多くの学生は、自分を他人に合わせるより、他人が自分に合わせることを望んでい	43.3	35.5	34.7	41.7
87.	学生は、規則や慣例にないことをする時は、必ず相談したり許可を求めたりする。	53.9	43.8	66.9	56.6
88.	授業の途中で出入りする学生は少ない。	59.0	19.2	70.7	36.0
89.	学内の多くの人には、他人への思いやりが少ない。	38.2	40.4	19.7	30.9
90.	時間通りに授業をはじめ教師は少ない。	50.7	54.7	33.9	40.6
91.	学生はお互いの行動をかなり厳しく批判しあっている。	24.4	21.7	25.9	27.4
92.	現代の社会的・政治的生活において、ほとんどの学生が自己のとるべき役割につ	36.9	15.8	47.7	34.3
93.	学内においては、お互いの道徳観・価値観の違いを認め合おうとしている。	52.1	57.1	69.5	54.9
94.	学生は、自分の個性に気が付いている。	55.8	61.1	67.8	64.6
95.	自主的な集会やデモがよく行われる。	48.8	32.0	34.3	36.6
96.	学内に哲学者や神学者がきて講演しても、聴衆は少ないだろう。	53.5	58.1	39.7	62.3
97.	学生の世界平和に対する関心は高い。	58.5	39.9	62.2	48.0
98.	この大学で、ほぼ広い考え方をしている教師が多い。	56.7	46.3	72.4	68.0
99.	授業内容とは関係なく、すすんでクラス討論をさせる教師が多い。	35.5	6.9	36.4	13.1
100.	休暇を利用して見聞を広めようとする学生が多い。	65.0	58.6	69.5	55.4

### Ⅲ. 結果の分析

CUES の結果の分析は調査課題に沿って項目分析と領域分析を行なった。項目分析については項目数が100にのぼるため、各領域を単位としてあつかい、その中で領域ごとに分析を行なった。以下次のような順序で分析の結果を述べる。

- (A) 北星学園大学の教育的環境の特性——1978年度および1979年度の環境の変化の比較も含む領域分析と項目分析
- (B) 新入生の期待値と上級生の環境認知の値との比較——領域分析と項目分析
- (C) 学科、学年、性別及び年度等による領域別得点の比較

#### A. 北星学園大学の教育的環境の特性

##### (i) 1978年度および1979年度の項目分析

はじめに全体の状況を知るために1978年度および1979年度の項目別回答について領域毎に検討してみた。その結果学年に関わらず学科間には差がないこと、および2, 3, 4年生の間についても差がないことが判明した（この点についてはC項で詳述する）。そこで2, 3, 4年生を一括して上級生としてあつかうことができるので、項目別得点は新入生（1年生）と上級生（2, 3, 4年生）の2群に分けて作表した。これが第4表である。第4表では簡潔な表現をするために各項目の叙述に対する肯定回答のみの百分率を記してある。否定の百分率は100と肯定の百分率との差により求めることができるからである。

第5表 CUES領域別得点の上級生の年度別による比較—78年度対79年度

領域	1978年度上級生		1979年度上級生		t
	N = 198		N = 175		
	M	SD	M	SD	
A 実用性	37.4	14.6	48.9	15.8	7.453***
B 学究性	32.2	16.6	42.5	18.6	5.762***
C 共同性	40.5	15.0	46.8	18.1	2.915***
D 妥当性	60.2	16.5	65.8	16.2	3.383***
E 意識性	43.6	19.3	48.6	19.7	2.491*

\*\*\*:  $P < .001$ , \*\*:  $P < .01$ , \*:  $P < .05$  (両側検定)

大学の教育的環境の継時的研究

第 6 表 CUES 領域別得点の大学・年度別比較

領 域	立 教 大 学				関西学院大	北星学園大	
	1972 N=385	1974 N=405	1975 N=279	1977 N=397	1976 N=613	1978 N=198	1979 N=175
A 実用性	45.0	43.8	43.3	42.0	50.5	37.4	48.9
B 学究性	26.8	28.7	28.1	29.1	27.5	32.2	42.5
C 共同性	50.9	51.5	52.3	53.9	52.5	40.5	46.8
D 妥当性	49.1	47.7	48.1	52.2	51.5	60.2	65.8
E 意識性	45.5	47.6	45.9	45.0	45.0	43.6	48.6

上級生の領域別得点の平均値を第5表に示した。領域得点は最大値が100であり50が中間値である。第5表には1978年度と1979年度の値の差のt検定を行なった結果をも併記してある。さらに第6表には立教大学および関西学院大学の領域別得点も併記し比較できるようにした。

以下各領域毎に有意な差を示す項目を中心にどのような環境の特性があらわれているかについて分析をすすめていきたい。

さて項目分析を行なうためにまず有意に肯定および否定がなされた項目を選びだした。同一標本群における百分率の差の検定において、0.01レベルの有意な差が生ずる分岐点は本調査の標本数からは肯定と否定の差が20%以上あれば充分であるので、60%以上の肯定または否定(40%以上の肯定は60%以上の否定となる)についてとりだしてみた。

(1) 実用性(項目1~10, 51~60)

実用性については78年度および79年度両年とも60%以上、肯定された項目が3項目(数字の大きな順序から56, 6, 52)で、単年度のみの肯定がなされた項目は78年度に1(53), 79年度においても1(51)であった。一方両年度とも60%以上の否定がなされた項目は5項目(59, 60, 7, 54, (9))で、78年度のみ否定された項目は4項目(58, 5, 10, 2)であった。以下にそれぞれの項目の叙述と、肯定回答の百分率を括弧内に78年および79年度とも示す。

両年とも有意に肯定された項目。

56: 学生の代表は、公に認められた手続きにのっとって選挙されている。(81.8, 84.6)

北 星 論 集 第17号

6. 成績優秀な学生には、特別に勉学奨励の機会が与えられる。  
(65.0, 70.9)

52. 新しい流行や流行語が、たえず学生の間ではやっている。  
(61.1, 61.1)

79年度のみ肯定された項目。

51. コンパやダンスパーティー等の社交の機会が沢山ある。  
(54.2, 61.7)

両年度で否定された項目。

59. キャンパスでは、多くの有名人が招かれ講演会・音楽会・学生討論会が開かれている。  
(9.4, 10.9)

60. この大学には、特別な資料や立派な設備がある。  
(12.3, 24.6)

7. 学生は、リーダーシップ養成の機会に恵まれている。  
(19.2, 32.6)

54. 多くの学生は自分の尊敬する人物のようになろうとする。  
(28.1, 33.1)

9. 学内環境は、大学にふさわしく美しく便利に整っている。  
(11.3, 34.9)

78年度に否定されたが79年度には否定されなくなった項目。

58. 学生に対して、病気予防のために、保健指導が徹底している。  
(19.2, 44.0)

5. この大学は、より実用的・現実的教育をする傾向がある。  
(26.1, 49.1)

10. 大学は、学生の能力や個性を生かす機会を与えている。  
(32.5, 48.0)

2. 学内は、標識や方向案内図等によってわかり易くなっている。  
(33.0, 57.1)

さて以上のようにみえてくると実用性に関する環境は決してよいとはいえないまでも、向上をしていることがわかる。特に78年度から79年度にかけて大きく向上したのは学内環境の整備等物理的環境（項目 9, 2, 60）の向上と、さまざまな学生厚生援助のプログラムの充実に関すること（項目58, 10, 7）であろう。

## 大学の教育的環境の継時的研究

したがって実用性の領域得点も37.4から48.9と大きく上昇して（第5表）その差は有意である。つまり大きく好転したといえよう。

どうしてこのような変化（環境の向上）が生じたのであろうか。本学では1978年前期に校舎の増築が行なわれ、増築された新校舎には新しく設けられた視聴覚教室の他8教室に加え学生全体で共用の学生研究室3室が設置されたこと、同時に校舎全体がぬりかえられ雰囲気が一新した。この施設上の改良が大きな変化をひきおこしたものと考えられるがこの点については最後に考察したい。

### (2) 学究性（項目11～20, 61～70）

学究性において両年度とも60%以上に肯定された項目は意味上の肯定（叙述が否定的な場合には否定をすることが意味内容においては肯定になる。以下同じように意味の上で肯定，否定をとり扱う。）をふくめて三つであった。

20. 多くの教授は、積極的に研究にたずさわっている。

(71.0, 75.3)

66. この大学では、入学すれば卒業は簡単である。（39.4, 28.6）

12. 一生懸命に勉強しなくてもたいていの科目は簡単にパスできる。

(34.0, 33.1)

79年度にのみ肯定された項目は二つあり、勉学の態度が向上したようすがうかがえる。

69. よい成績をとろうと努力する学生が多い。（47.3, 65.1）

62. ほとんどの科目では、持続的な勉強や予習が必要である。

(46.8, 60.0)

両年度において否定された項目は、9項目にのぼり全領域中最多である。79年度の否定の比率のもっとも高いものから記してみよう。なお、意味上での否定をしている項目（67, 13など）は否定項目としてとりあつかった。

67. この大学では、大学院に進学する者が少ない。

(91.1, 89.7)

13. 学生は、授業中さされるまではすすんで発言しない。(90.1, 86.3)

16. 教授は、学生の能力を十分ひき出している。(5.9, 17.7)

15. 学生は目標を高くおき、それにむかって努力している。

(17.2, 21.1)

61. 教師の研究室をたずねて、議論をしたり、質問したりする学生が多い。

(23.2, 22.3)

64. 学生は勤勉であり、確固たる勉学目標をもっている。

(10.8, 23.4)

17. 学生の間では、真剣な知的レベルの高い討論がよく行われている。

(16.7, 23.4)

19. 誰でも、単位をとり易い科目と、とりにくい科目を知っている。

(67.5, 72.0)

18. 学問のきびしさを教える教師は少ない。(73.9, 65.1)

次に78年度にのみ否定された項目は次の4項目である。

11. 学生の勉強意欲をかり立てるような教授方法を工夫し実行している教師は少ない。

(78.3, 49.7)

70. 多くの学生は、自分の専攻を決めるにあたって、はっきりした目的を持っている。

(27.6, 53.1)

63. 知的レベルの高い授業が多い。(29.1, 49.1)

65. この大学は、純粋な学問や基礎研究の面ですぐれている。

(33.5, 49.7)

以上の結果が示していることは本学における学究的環境の乏しさである。教育の面においても、学生の学習態度や向学心においても、望ましい水準にはほど遠いといわねばならぬであろう。しかしある程度の教育水準が保たれているであろうことは卒業が簡単にはできないということの自覚や、単位取得もかなりの努力が必要だという認識がなされている点にみられる。さらに1978年から1979年にかけて学究的環境が向上したことは多くの項目(11, 63, 65, 69, 70)で有意な変化としてみられる。またほとんどすべての項目において望ましい方向へ変化がみられるのは大学全体の雰囲気がよく変ってきたことを示すものであろう。

第5表の学究性の領域得点においてはこのことがより明確にあらわれ

## 大学の教育的環境の継時的研究

ている。すなわち1978年度は学究性は32.2であったが、1979年度には42.5に上昇して統計的に高い確率で有意な変化をしているのである。

### (3) 共同性 (項目21~30, 71~80)

まず両年度において肯定された項目は6, 79年度のみ肯定された項目は3である。一方両年度で否定された項目は3, 78年度においてのみ否定された項目は9であり、このことは共同性のいちぢるしい向上を示しているといえよう。

両年度において肯定された項目。

- 24. 学生は、困った時はお互いに助け合う。 (80.3, 87.4)
- 23. 学生は、気軽によく貸し借りをする。 (85.7, 83.4)
- 25. 多くの人は、自分の周囲の人に対して思いやりがある。  
(61.1, 73.1)
- 28. 麻雀をするとか、映画を見に行くとかいうことで、仲間はすぐ集まる。  
(60.6, 73.1)
- 79. この大学の社会的評判はとても気になる。 (67.0, 71.4)
- 78. クラブ活動は、大学にとって必要不可欠なものである。  
(67.0, 68.6)

79年度のみ肯定された項目。

- 73. 学内では、仲間意識が高い。 (52.7, 73.7)
- 26. 多くの上級生は、新入生が学園生活にとけこめるよう積極的に手助けをしている。 (54.3, 65.1)
- 71. 大学祭には、学内の雰囲気盛り上がる。 (34.0, 60.0)

両年度において否定された項目。

- 30. 自治会選挙に無関心な人が多い。 (85.2, 94.3)
- 29. 大学の行事に、多くの学生は積極的に協力する。  
(15.3, 28.6)
- 74. ほとんどの教授は、学生の個人的な問題に興味がない。  
(70.4, 62.9)

78年度のみにおいて否定された項目。

- 75. お互によく知り合えるような機会が多くある。 (23.6, 41.1)

72. 学生主催の行事や講演は、みんなの話題になる。(24.1, 40.0)  
76. 教職員に対して、学生は親近感を持っている。(26.1, 49.1)  
80. この大学の個性を誰もが感じている。(28.1, 57.1)  
77. 多くの学生は、卒業してからも何らかの形で、大学とつながりを  
持ちたいと思っている。(33.5, 41.7)  
21. 学内には、うわべだけの表面的なつきあいが多い。  
(65.5, 50.9)  
71. 大学祭には、学内の雰囲気盛り上がる。(34.0, 60.0)  
22. 学生は、バー、喫茶店や友人の部屋で時間を過ごすことが多い。  
(60.1, 50.3)

これまでの三領域の中では最も多くの項目が肯定されている。このことは共同体意識が強いことを思わせるが、ただその共同体意識の内容は仲間意識(23, 24, 25, 26, 28, 73, 78)であり、大学共同体としての共同性にまではたかまっていなかったということがわかる。すなわち学生と大学との関わりについてふれている項目(29, 30, 74)においては否定的であり、また76のように教職員と学生の間にはへだたりがある。しかしこの共同性においても前述のようにいちぢるしい向上がみられ、78年度から79年度にかけて肯定的方向への有意な変化を9項目(21, 26, 27, 71, 72, 73, 75, 76, 80)が示している。すなわち教職員に対して学生は親近感を増し(26.1%→49.1%)、大学の個性を感じとるようになってきつつあり(28.1%→57.1%)、学内での仲間意識が非常に高くなってきている(52.7%→73.7%)のである。

領域得点では1978年度において40.5とやや低かったが、1979年度には46.8と上昇をしてやはり有意に変化したことを示している。

#### (4) 妥当性(項目31~40, 81~90)

妥当性に関しては、もっとも肯定された項目が多かった。まず兩年ともに60%以上の肯定回答を得た項目は13項目もあり、79年度のみ肯定された2項目を加えると14項目について肯定的応答がなされているのである。そして否定的な回答はわずか4項目についてしかなされていない。兩年度において肯定された項目



大学の教育的環境の継続的研究

31. 学生団体は、社会のルールは勿論、大学の規則に従って活動している。(76.4, 83.4)
39. すべての学生は、大学に対して現住所を常にあきらかにしている。(77.3, 81.7)
33. いつも何かの役に立とうと思っている人は、やっかい者と思われる。(21.2, 18.9)
32. 学生が泥酔したり、乱暴したりするようなことはめったにない。(75.4, 80.6)
35. 学生の出版物が個人攻撃をしたり、特定の団体の名誉を傷つけるようなことはしない。(73.9, 79.4)
83. 学生は、時々とっぴな行動をしたり反抗したりする。(28.6, 24.6)
82. 学生は、自由奔放な態度で教授を戸惑わせている。(25.6, 26.3)
40. 学生は、団体生活において、自分の健康管理を行なっている。(70.4, 72.0)
89. 学内の多くの人には、他人への思いやりが少ない。(40.4, 30.9)
81. 学生は、団体として行動する場合は、大学に属している。(69.5, 68.0)
85. 学内で、学生のはめをはずした行動は考えられない。(67.0, 66.3)
38. 学生は、音楽会や講演会で騒いだり身を入れて聞かないことがある。(35.0, 40.0)
- 79年度のみ肯定された項目。
36. 学生の規則違反は、普通黙認されている。(44.3, 32.0)
34. 学生は、大学の所有物を良心的に扱う。(45.3, 60.0)
- 両年度もしくは78年度で否定された項目。
88. 授業の途中で出入する学生は少ない。(19.2, 36.0)
37. この大学では、目上の人に尊敬を払うべきだと思っている人が多い。(34.0, 37.7)
84. 学生は、規則などあまり気にかけていない。(67.0, 61.1)

86. 多くの学生は、自分を他人に合わせるより、他人が自分に合わせることを望んでいる。(35.5, 41.7)

以上に記した項目に対する回答からよみとれることは本学の妥当性に関する状況はきわめて高いということである。1979年度のみをとりあげれば実に16項目にもわたって60%以上の肯定的(意味の上で)な回答を得ているのである。すなわち学生は個人としても団体としても礼儀が正しく、またよく規則等を守って行動をしているということが示されている。

年度別に各項目の比較をしてみると、他の領域と同じように1978年から1979年にかけてさらに向上したことがうかがわれる。ほとんどの項目においてのぞましい方向への変化がみられるからである。

妥当性に関する領域別得点は1978年度60.2と他にぬきんでて高く、1979年度には65.8とさらに高くなり、その変化は有意であり、後述するが、これは他大学と比較すれば驚ろくべき高さの妥当性である。

(5) 意識性(項目41~50, 91~100)

意識性の項目については1978年度においては肯定がわずかに2項目であるのに対し、否定が7項目もあり、意識性の低さがうかがわれた。しかし1979年度の回答では肯定が6項目に増え、否定は7項目と変化がなかった。兩年とも肯定はわずかに2項目であり、一方兩年とも否定は6項目であった。

兩年とも肯定の項目。

49. 教授の中には、様々な話題の人物がいる。(66.0, 76.0)

94. 学生は、自分の個性に気が付いている。(61.1, 64.6)

79年度のみ肯定の項目。

42. 大部分の学生は異った考え方や事柄をかなり冷静に客観的に判断している。(53.7, 68.0)

98. この大学では、はばの広い考え方を持っている教師が多い。(46.3, 68.0)

48. 進歩的文化人の発言には、かなり関心がある。(54.2, 62.9)

大学の教育的環境の継時的研究

44. ここでは、自己の視野を広げるような機会はめったにない。  
(53.2, 40.6)

兩年とも否定の項目。

99. 授業内容とは関係なく、すすんでクラス討論をさせる教師が多い。  
(6.9, 13.1)
43. 学内のあちこちで議論している人達がいる。  
(30.5, 25.1)
91. 学生はお互の行動をかなり厳しく批判しあっている。  
(21.7, 27, 4)
92. 現代の社会的・政治的生活において、ほとんどの学生が自己のとるべき役割について強い意識と責任を感じている。  
(15.8, 34.3)
95. 自主的な集会やデモがよく行なわれる。  
(32.0, 36.6)
47. 学生は、国内外の情勢に大いに関心を持っている。  
(35.5, 38.3)

兩年のうちどちらかが否定の項目。

96. 学内に哲学者や神学者がきて講演しても、聴衆は少ないだろう。  
(58.1, 62.3)
97. 学生の世界平和に対する関心は高い。  
(39.9, 48.0)

意識性の領域についての反応は肯定と否定とが交互している。兩年とも肯定の項目は個性的な人間の存在、すなわち個人的関心に関わるものである。しかし1979年度にはさらに社会的関心に関する項目についても肯定的になってきている。一方で大学内での社会問題その他についての議論はどちらかといえはすくないと感じられている。

領域別得点の変化がもっとも少なかったのがこの意識性であり、1978年から1979年にかけて向上はしているもののその変化の有意度は5%レベルである。

さて以上の分析からよみとれることは、まず第一に5領域の中で妥当性がきわめて高い値を示しているということである。これが本学の特徴といえるであろうが、この点については次節において他大学との比較を

行なう時にふれたい。

次にきわめて著しい現象はすべての領域において1978年度から1979年度にかけて肯定的な方向へ変化が生じたということである。ほとんどの項目において肯定回答が増しており、特に20%を越える肯定回答の増加は14項目にもほっている。そして領域別得点の変化はすべて統計的に有意である。このことは1978年度から1979年度にかけて大学環境が全体として著しく向上をしたということを示す。勿論向上したとはいえそれは相対的に1978年度より1979年度がよくなったということであり、1979年度の大学環境が良いということではない。望ましい基準に達しているのは妥当性のみで、他の領域についてはようやく平均的基準に達した程度であろう。しかし、この点については他大学との比較によりはじめて評価が可能であるので、次項で考察を行ないたい。

#### (ii) 他大学の CUES の結果との比較

さてこれまでは本学のみ項目別および領域別得点を分析してきたが、本学の特徴を知るためには他大学との比較を行なわずにはできないので、本節においては他大学の CUES 実施の結果を本学のそれと比較しながら本学の環境の特徴をうきぼりにしたい。ただし項目を扱うことは数が多くなるので、ここでは領域別得点のみに限定をした。

すでに1972年から行なわれている立教大学の CUES の結果はこの意味で貴重である。それに加えて1976年の関西学院の結果との比較も可能なように第6表に大学および年度別の領域得点を示した。さてこの表からいくつかのことがよみとれよう。まず本学の1979年の得点を立教の77年及び関西学院の得点と比較してみると、本学の特徴はきわめて高い妥当性と学究性にある。すなわち本学の妥当性65.8は立教大学の52.2および関西学院大学の51.5よりはるかに高く、同様に学究性42.5も前二者の29.1および27.5をはるかに越えている。もっとも学究性については本学は相対的に高いのであって前二大学が低すぎるという表現の方が適切であるかもしれない。

次に本学の実用性は49.9で、立教の42.0よりは高いが関西学院の50.5よりはほんのわずかに低い。また本学の意識性は48.6で、立教および関

## 大学の教育的環境の継時的研究

西学院の45.0よりもやや高い。しかしこの程度では相互に差異があるとはいえないであろう。

共同性については本学の値は46.8であり、立教の53.9と関西学院の52.5よりかなり低くなっている。しかし1979年と比較すればかなり上昇したのであるが、この点についてはまだ伝統ある大学におよばないのであろうか。

以上の比較からも1979年現在の北星学園大学の特徴は妥当性と学究性にあると結論することができるであろう。1978年度においても妥当性は60.2できわめて高い値を示していた。ただ学究性は32.2であったので、1978年度から大きく向上した結果であり、妥当性ほど安定した特徴とはいえないかもしれない。また、既述のようにこれは本学が高いということより他が低いために相対的に高くなっているということも考慮に入れるべきであろう。

次に立教大学の結果は1972年から1977年にかけて4回の値がほとんど変わっていない。わずかに実用性において少し値が低くなっていること、学究性、共同性、妥当性において逆にわずかに高くなっているが、いずれの場合でもその差は小さく、微増、あるいは微減といってよい。このことから大学環境が立教では安定していると考えられる。しかしながら、北星学園の場合の1978年度から1979年度への変化は既述のように著しく大きく、すべての領域において有意な変化をしている。この現象はきわめて特異であるといわねばならない。しかもこの変化はすべて同じ方向を示しているので、より望ましい環境が形成されてきたということができよう。しかし1979年度における環境はまだ理想とはほど遠く、望ましい水準からみても妥当性を除いては決して充分であるとはいえないが、すくなくとも望ましい方向へ向って変っているということ、およびおどろくほどの変化の大きさにはきわめて重要な意味があるということの評価すべきであろう。この変化の原因、意義については最後に考察をしたい。

### B. 新入生の期待値と上級生の環境認知の値との比較

これまでの分析に用いた値はすべて一年以上の在学期間をもつ上級生の回答であった。したがって、その結果は調査時点における大学の環境をあらわしたものである。これに対して新入生の回答は未だ大学生活をほとんど経験していないのであるから、これは大学環境そのものをあらわしているのではなくて、大学環境がどのようなものであると考えているか、どのようなものであると想像をしているか、あるいは期待をしているかということであらわす値となる。

さて、この期待値はスターンによれば米国の大学ではおおむねより好意的な、在学生よりも高い値を示すのが普通であり、したがって彼はこれを新入生の大学に対する期待値 (Freshman expectations)<sup>(15)</sup> とよび一つの意味をもたせたのである。すなわち、調査の結果では新入生の期待値は実際の環境より通常は高い値をとるので、新入生により正しい情報を与え、大学の正しい選択を可能にさせるのがのぞましいというのである。

この考え方はわが国の場合においてもあてはまるであろうか。本調査の新入生の回答は入学後約一週間で得たものであり、スターンのいう新入生の期待値と考えてよいであろう。本節においてはこの新入生の期待値と上級生が感じている認識値(期待値と比較のために上級生の値をこうよぶこととする)との比較を通して新入生の意識を探ってみたい。

さて、新入生の項目別回答の結果も第4表に記されている。第4表の数字によれば、ほとんどの項目において新入生は上級生よりも大学環境を肯定的にみている。単純に数字上のより肯定的(肯定的な叙述においては数字の大きい方がより肯定的であり、否定的な叙述においては数字の少ない方がより肯定的だと考える)な数を比較してみると、1978年度においては新入生の方がより肯定的なうけとめかたをした項目が80にもほり、逆の場合はわずか20にすぎない。1979年度は新入生がより肯定的な項目はさらに多く85にも達している。しかし統計的に有意な差をもつ項目のみに限ると(相互に独立な群間においては本調査の標本数では約15%以上の差で有意といえる)新入生が上級生より15%以上の差を示している項目は1978年度においては45である。上級生の方がより肯定的

## 大学の教育的環境の継時的研究

な項目は1項目にしかすぎない。1979年度については新入生の方がより肯定的な項目は36と前年度より差がすこしちぢまっている。上級生が新入生より肯定的であった項目は皆無である。

こうして新入生と上級生を比較してみると、米国の場合と同様に新入生は上級生よりもはるかに大きな、高い期待をしていることがわかる。さらにこの中で78年度もしくは79年度のいずれかにおいて特に大きな差(約20%以上)のある項目は34もあるので、次にこれらの34項目について領域別に検討してみよう。

まず実用性の領域では次の8項目である。括弧内の数字は78年度および79年度の上級生との百分率の差をあらわしている。

7. 学生は、リーダーシップ養成の機会に恵まれている。  
(36.1, 21.4)
8. この大学は、学生が不満を申し立て易いようになっている。  
(20.7, 18.3)
9. 学内環境は、大学にふさわしく便利に整っている。  
(12.7, 35.0)
10. 大学は、学生の能力や個性を生かす機会を与えている。  
(25.6, 18.5)
51. コンパやダンスパーティー等の社交の機会が沢山ある。  
(26.0, 26.6)
55. この大学では、実用的コースが設けられている。  
(18.5, 19.4)
58. 学生に対して、病気予防のために、保健指導が徹底している。  
(15.4, 20.0)
60. この大学には、特別な資料や立派な設備がある。  
(22.3, 26.9)

以下9項目すべてについて両年とも新入生の期待と上級生の認識には大きな差があることがわかる。つまり一般的に新入生は大学はより実用性の高いところだと期待して入学をしているのである。特に項目9についてはいわゆる外観であるので、新入生に比較的早く認識され易い事柄であり、その結果、整備されたばかりの環境に対して新入生はすぐ素直

に反応したのに対し(新生の肯定率は66.9%), 上級生は前年度までの後遺症があったので(上級生は34.9%)非常に大きな差が生じたのであろう。それでも上級生の場合にも11.3%から34.9%と実に23.6%の上昇によってよみとれるように前年度よりはるかに高くなっているのである。

次に学究性についてはもっともその差がはげしく実に13項目において両年度のどちらかに20%を越える差がみられる。

11. 学生の勉強意欲をかり立てるような教授方法を工夫し実行している教師は少ない。(20.2, 2.8)
12. 一生懸命に勉強しなくてもたいていの科目は簡単にパスできる。(21.1, 23.4)
14. 教科書だけ勉強しておけば、ほとんどの試験に間に合う。(21.2, 20.5)
15. 学生は目標を高くおき、それにむかって努力している。(26.6, 24.1)
18. 学問のきびしさを教える教師は少ない。(31.5, 34.1)
19. 誰でも、単位をとり易い科目と、とりにくい科目を知っている。(28.8, 22.2)
61. 教師の研究室をたずねて、議論をしたり、質問したりする学生が多い。(11.4, 28.7)
62. ほとんどの科目では、持続的な勉強や予習が必要である。(34.3, 26.2)
63. 知的レベルの高い授業が多い。(29.4, 19.1)
64. 学生は勤勉であり、確固たる勉学目標をもっている。(24.7, 18.0)
66. この大学では、入学すれば卒業は簡単である。(21.9, 11.9)
68. ほとんどの学生は、授業でノートをきちんととろうとする。(20.6, 21.6)
70. 多くの学生は、自分の専攻を決めるにあたって、はっきりした目的を持っている。(25.4, 13.0)

以上から新生にとっての大学のイメージは、きわめて高い学究的雰囲気と、それに従って勉学にはげんでいる学生がいるということなので



## 大学の教育的環境の継時的研究

あろう。つまり、新入生は大学に対して学問の府としての神話的幻想を持っているといえよう。

次に共同性に関しては7項目について大きな差がみられる。

26. 多くの上級生は、新入生が学園生活にとけこめるよう積極的に手助けをしている。 (34.0, 21.5)

29. 大学の行事に、多くの学生は積極的に協力する。 (34.9, 38.8)

30. 自治会選挙に無関心な人が多い。 (16.1, 34.9)

71. 大学祭には、学内の雰囲気盛り上がる。 (41.6, 27.0)

72. 学生主催の行事や講演は、みんなの話題になる。 (28.0, 24.4)

75. お互によく知り合えるような機会が多くある。 (24.8, 22.1)

80. この大学の個性を誰もが感じている。 (19.4, 12.0)

これらの項目は学生間のことだからというよりも行事的なことをめぐる事項であるが、大学主催のものでない学生主催の行事や自治会活動も新入生の期待とはかけはなれているというのが現実である。項目80は79年度において差がちぢまったが、これは大学に個性的なものが生じてきたためであろうか。ちなみにこの項目に関する上級生の78年度から79年度への回答も28.1%から57.1%と29%も増加している。

次に妥当性については最も新入生と在学生の差がない領域である。大きな差はわずかに1項目であるにすぎない。

88. 授業の途中で出入りする学生は少ない。 (39.8, 34.7)

そしてこの1項目が全項目中もっとも大きな差のある項目となっている。前章で明らかになったように本学の環境としては妥当性をもっとも高いにも拘らず、この項目については問題が感じられる。しかし在学生のこの項目の値も78年度から79年度に16.8%の向上をみているので、このことは全般的な環境の向上がこうしたところにも影響を与えているように思われる。

最後に意識性については妥当性に次でその差は小さい。次の5項目に特に大きな差がみられるにすぎない。

41. 学内ですぐれた科学者が来て講演しても聴衆は少ないだろう。  
(7.9, 23.2)
47. 学生は、国内外の情勢に大いに関心を持っている。  
(22.1, 22.0)
92. 現代の社会的・政治的生活において、ほとんどの学生が自己のと  
るべき役割について強い意識と責任を感じている。  
(21.1, 13.4)
96. 学内に哲学者や神学者がきて講演しても、聴衆は少ないだろう。  
(4.6, 22.6)
99. 授業内容とは関係なく、すすんでクラス討論をさせる教師が多  
い。  
(28.6, 23.3)

これらからみられることは大学外の社会への関心が新入生の期待ほど  
ないということであろう。社会意識に関する他の項目(46, 97)につい  
てもかなりの差がみられる。それに対して個人に関する意識については  
それほど差がない。

さて以上項目別について新入生の期待値と上級生の認識している現実  
の値とを比較してきたが、これらは領域別得点ではどのようにあらわさ  
れているであろうか。

第7表は1978年度、また第8表は1979年度における新入生对上級生の  
領域別得点の平均値と、ならびに平均値の差を検定した  $t$ -値をそれぞ  
れ示したものである。

第7表 CUES領域別得点の在学年数の差異による比較—1978年度

領 域	新 入 生		上 級 生		t
	N = 217		N = 198		
	M	S D	M	S D	
A 実用性	50.7	17.0	37.4	14.6	8.396***
B 学究性	53.1	19.4	32.2	16.6	11.489***
C 共同性	48.3	17.5	40.5	15.0	3.634***
D 妥当性	61.3	17.9	60.2	16.5	0.660
E 意識性	53.8	23.1	43.6	19.3	4.757***

\*\*\*:  $P < .001$ , \*\*:  $P < .01$ , \*:  $P < .05$ . (両側検定)

大学の教育的環境の継続的研究

第 8 表 CUES 領域別得点の在学年数の差異による比較—1979年度

領 域	新 入 生		上 級 生		t
	N = 239	M	N = 175	S D	
A 実 用 性	62.2	16.6	48.9	15.8	8.366***
B 学 究 性	58.6	19.0	42.5	18.6	8.824***
C 共 同 性	58.7	17.7	46.8	18.1	4.702***
D 妥 当 性	71.5	18.9	65.8	16.2	3.325***
E 意 識 性	60.0	21.9	48.6	19.7	5.631***

\*\*\*:  $P < .001$  (片側検定)

まず1978年度については項目別の比較でみられたように妥当性についてはほとんど差がないことが領域別得点においても示されていることがわかる。次にその他の領域については、いずれもきわめて大きな差があることが、両側検定によっても0.1%レベルの有意な差を示していることから明らかである。さらに特に学究性と、実用性は大きな t-値を示していることから項目別分析の内容とまったく一致している。

次に1979年度について比較してみると、学究性および実用性は1978年度の場合と同じく大きな差がみられる。さらに意識性、共同性につづいて妥当性についても0.1%で有意な差が生じている。これまででさえ高い妥当性に対して、1979年の新生の期待度がますます高くなったということは、さらに妥当性が高まる働きをすることになるのであろうか。

以上領域別得点について新生と上級生を比較した結果、両者には期待と現実との大きな差があることが示された。このような差は在学していくうちになくなるのであろうか。ペースは新生は上級生の値に近くなるといい、それには約6ヶ月を要するといっている。立教大学や、関西学院においては調査の時期が11月から1月頃にかけて行なわれているため一年生と上級生との間の差はほとんどみられない。すなわち、それまでの間に一年生の環境への認識は上級生へのそれに同化したのであろう。それでは北星学園大学ではどうであったのか、次章はこの問題をふくみ、属性によって環境のみかたがどう異なるかという問題について分析をすすめたい。

### C. 学科、学年、性別等属性および年度別による領域別得点の比較

はじめに述べたように米国において CUES を実施した結果の一つの結論は個々の大学はそれぞれの特徴をもっているが、その特徴はその大学の成員にとっては共通にうけとめられている、すなわち学年や学科、性や住居等のちがいはその環境の認識にはあまり影響しないということであった。

一方わが国における CUES 実施の結果をみると立教大学においては過去4回(1972年, 1974年, 1975年, および1977年)の実施によりかなり系統的なデータが得られている。それによると属性のちがいによる環境認知の差異は次のような傾向であらわれている。

まず性別については女子が妥当性および意識性で男子よりやや高いということである。さらに共同性および実用性においてもつねにわずかではあるが女子の方が高い得点を示している。

次に学年別については系統的な差異はほとんどみられない。ある年に4年生が共同性において高くても、次の年には低くなっており、その年その年により異なる結果となってあらわれている。ただし大学院生については学究性はつねに高く、逆に共同性についてはつねに低いという特徴があらわれている。

学科については理学部が学究性で比較的高く、実用性で低くなっている。社会学部は逆に実用性で比較的高く、学究性は低くなっている。文学部は妥当性においてやや高くなっている。以上の傾向は統計的な検定がなされていないために年度別の数値の単純な比較により、系統的な傾向のあらわれとしてとらえてみたにすぎない。このことから属性により差があるとはいえない。

一方関西学院は一回のみの調査であるが、神学部の特異性がみられ、学究性と意識性が高くなっている。また理学部も学究性に高い値を示している。一方学年別および性別については立教とは異なり系統的な差異はほとんどみられない。

以上の結果から、わが国においても、大学における特徴は属性によってうけとめかたが異なるとはいえないように思われる。特に性や学年は

大学の教育的環境の継時的研究

環境のうけとめ方に関係がなく、むしろ学部による特徴があるように思われる。この点についてはそれぞれの大学の物理的環境とも関係があると考えられるのでなお継続した検討が必要であろう。

さて、北星学園については属性等のちがいから環境のうけとめ方に差異が生じているであろうか。これを検討するために領域別得点について属性別に、二群間の比較においてはt検定を、三群以上の場合には分散分析を行なって分析を試みた。

さて、はじめに学年間の分析を行なった。すでに新入生と上級生の間には差があることは明らかにされているので、ここでは上級生の間ではたして差異があるのかどうかについて分散分析を行なった。その結果が第9表および第10表に示してある。

第9表 CUES領域別得点の学年別比較—1978年度

	2年生 N = 125		3年生 N = 7		4年生 N = 67		F
	M	SD	M	SD	M	SD	
A 実用性	38.0	15.8	42.9	15.0	35.2	12.0	1.267
B 学究性	32.3	15.7	45.7	18.1	29.5	17.5	3.192*
C 共同性	39.9	14.7	44.0	23.3	40.3	14.2	0.176
D 妥当性	60.2	16.8	61.4	16.0	59.9	16.5	0.027
E 意識性	44.4	20.0	47.9	24.5	41.5	17.8	0.647

\*:  $P < .05$

第10表 CUES領域別得点の学年別比較—1979年度

	2年生 N = 144		3年生 N = 23		4年生 N = 8		F
	M	SD	M	SD	M	SD	
A 実用性	49.4	16.2	47.4	13.6	46.7	22.3	0.207
B 学究性	42.1	19.3	38.2	14.9	54.3	21.1	1.941
C 共同性	48.2	19.4	46.3	19.9	45.0	22.9	0.112
D 妥当性	65.6	16.5	68.2	15.1	62.1	14.7	0.384
E 意識性	47.8	19.9	48.2	18.9	60.0	25.2	1.278

分散分析の結果は1978年度の学究性においてのみ三群間に有為な差がみられるという F-値が得られただけであり、かつこの値も3年生の標本数が7であること、および1979年にはまったく逆の傾向を示していることからむしろこの標本群に特有な値と考えるべきであろう。他の分散分析はいずれも有意な値を示していない。すなわち、学年間の差異はないということが結論づけられるといえよう。

このことは、実は A-i においておこなった項目分析および領域分析において上級生を一括してとり扱ったことの基礎を与えている。すなわち、2, 3, および4年生は環境の認識において差がないと考えられるので同一標本群として扱うことができることを示しているのである。

次に性別による比較は第11表に1年生のみの男女間の比較、第12表に上級生の男女間の比較した結果を示してある<sup>(18)</sup>。それぞれの表の t 値が

第 11 表 CUES 領域別得点の1年生の性別による比較—1978年度

領 域	男 子		女 子		t
	N = 82		N = 118		
	M	SD	M	SD	
A 実用性	51.1	16.1	50.8	17.0	0.140
B 学究性	51.7	17.9	54.1	19.8	0.779
C 共同性	52.8	15.3	46.6	17.6	1.735
D 妥当性	60.6	17.2	62.0	18.5	0.355
E 意識性	52.7	21.2	54.5	24.6	0.469

第 12 表 CUES 領域別得点の上級生の性別による比較—1978年度

領 域	男 子		女 子		t
	N = 42		N = 139		
	M	SD	M	SD	
A 実用性	35.5	15.6	37.9	14.1	0.957
B 学究性	33.5	17.0	31.6	16.6	0.647
C 共同性	43.3	15.7	39.1	14.4	1.343
D 妥当性	58.5	14.8	60.1	16.9	0.565
E 意識性	44.1	24.8	43.1	17.9	0.308

大学の教育的環境の縦時的研究

示すように性による環境の認識の差異は統計的検定によっては有意ではない。しかし共同性においては男子が女子よりもやや高い数字を示している。立教大学や関西学院大学では女子の方が共同性においてわずかではあるが高い得点を示していたことと比較すると北星の場合はむしろ逆の現象があるといえよう。

学科別得点の比較の結果は第13表から第16表に示してある。分散分析の結果学科間に有意な差がある領域は1979年度の1年生における実用性と上級生の妥当性のみであった。しかし1978年度において同様な傾向があるとはいえないので、この差異については属性によるものというよりも同年度における標本群の特性と考える方がよいであろう。統計的には有意な結果とはいえないが両年度に共通な傾向がみられるのは社会福祉学科の上級生の学究性及び意識性の値が他学科よりも高いことである。

第13表 CUES領域別得点の1年生の学科別による比較—1978年度

領 域	英 文		社会福祉		経 済		F
	N = 62		N = 77		N = 67		
	M	SD	M	SD	M	SD	
A 実用性	51.9	18.5	52.4	17.5	47.6	14.5	1.708
B 学究性	55.8	19.9	54.4	19.8	48.8	17.9	2.268
C 共同性	44.3	20.5	47.4	18.1	54.0	10.5	2.649
D 妥当性	62.7	17.6	62.5	19.5	58.1	16.5	1.142
E 意識性	52.4	23.7	56.9	25.7	51.3	18.9	1.132

第14表 CUES領域別得点の上級生の学科別による比較—1978年度

領 域	英 文		社会福祉		経 済		F
	N = 68		N = 58		N = 65		
	M	SD	M	SD	M	SD	
A 実用性	36.2	14.7	39.2	12.5	36.8	16.5	0.726
B 学究性	31.2	15.7	34.7	16.8	30.1	17.3	1.301
C 共同性	38.7	17.0	41.0	12.7	41.9	14.2	0.565
D 妥当性	60.3	18.9	58.9	14.9	60.3	14.7	0.151
E 意識性	41.7	17.9	48.5	21.5	41.3	18.4	2.655

第 15 表 CUES 領域別得点の 1 年生の学科別による比較—1979年度

領 域	英 文 N = 82		社会福祉 N = 66		経 済 N = 86		F
	M	SD	M	SD	M	SD	
A 実用性	63.1	18.5	66.0	14.3	58.8	15.3	3.729*
B 学究性	60.7	20.0	60.3	17.3	55.8	18.7	1.703
C 共同性	59.6	19.0	58.8	15.8	59.0	16.7	0.018
D 妥当性	72.8	16.9	73.0	17.7	69.4	21.3	0.941
E 意識性	60.0	20.3	61.5	20.7	59.3	23.9	0.199

\*: <.05 (両側検定)

第 16 表 CUES 領域別得点の上級生の学科別による比較—1979年度

領 域	英 文 N = 53		社会福祉 M = 69		経 済 N = 46		F
	M	SD	M	SD	M	SD	
A 実用性	49.2	14.1	50.9	16.9	45.7	15.9	1.513
B 学究性	40.4	20.3	44.9	18.6	39.4	16.7	1.461
C 共同性	47.5	19.6	49.1	19.1	46.2	20.2	0.164
D 妥当性	70.6	16.3	63.4	14.8	63.8	17.3	3.449*
E 意識性	44.7	18.7	51.4	21.1	47.2	19.3	1.755

\*: P<.05 (両側検定)

第 17 表 CUES 領域別得点の上級生の所属サークルによる比較—1979年度

領 域	文化系 N = 73		体育系 N = 30		両方に所属 N = 6		所属なし N = 91		F
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
A 実用性	51.0	15.4	46.4	17.5	48.3	15.4	48.1	15.7	0.731
B 学究性	39.6	19.6	37.8	16.7	49.2	21.1	46.0	17.7	2.590
C 共同性	48.7	18.7	53.9	21.9	40.0	10.0	42.9	15.7	1.935
D 妥当性	67.9	16.1	63.8	16.4	58.3	17.8	65.2	16.1	1.065
E 意識性	49.0	20.5	47.1	19.6	55.8	20.8	48.2	19.3	0.349



大学の教育的環境の維持的研究

1年生の場合にも社会福祉学科の意識性はやや高い。しかし上級生においてむしろその傾向が増加するということは社会福祉という特殊な領域に学んだ結果意識性が高まるのであろうか。

次に1979年度の上級生についてサークルに所属している場合とそうでない学生に分けて比較した結果を第17表に示してある。分散分析の結果では各群間の差は有意であるとはいえない。サークル活動は環境への認識を特色づけえないのであろう。

以上の結果と立教大学、関西学院大学の結果を総合して一般的な結論をだすとすれば、わが国においても属性のちがいによっては環境の認知に差異は生じないということができよう。すなわちそれぞれの大学における環境はその大学の学生であれば、性、学年、学科、または所属サークルの別なくほぼ共通にとらえているということがいえよう。

このようにみえてくると北星学園大学の場合の1978年度から1979年度にかけての変化の大きさはまさに異常であったといわねばならない。それはいったい何に起因しているのであろうか。学年によってうけとめ方に差異がないということは環境そのものが実際に変化をしたということである。したがって1978年度の1年生の期待値はその年度の上級生の認識値に比してきわめて高い値を示したが、1年を経過した後の環境の認識値は1年前の期待値ときほど異ならないものとなっている。このことを示すのが第18表の比較である。同表の1979年の2年生は前年の1年生であり、つまり同一群の別年度における値である。それによると実用性お

第18表 1978年度1年生のCUES領域別得点の変化—78~79年

領 域	1978年度の1年生		1979年度の2年生		t
	M = 217		N = 144		
	M	S D	M	S D	
A 実用性	50.7	17.0	49.4	16.2	0.731
B 学究性	53.1	19.4	42.1	19.3	5.167***
C 共同性	48.3	17.5	48.2	19.4	0.005
D 妥当性	61.3	17.9	65.6	16.5	2.275*
E 意識性	53.8	23.1	47.8	19.9	2.543*

\*\*\*:  $P < .001$ , \*\*:  $P < .01$ , \*:  $P < .05$  (両側検定)

よび共同性は1年を経過したあとにおいてもほとんど変わっていない。これはその間に環境が変わったということを示している。また、妥当性においてはむしろ期待値よりも環境の変化の方が上まわって向上をしたというおどろくべき結果があらわれている。学究性と意識性の値については、期待値ほどには上昇しなかったものの、1978年度から1979年度への変化は有意である。以上が示すことは全般に著るしい環境の向上があったということである。

このような激しい環境の変化(向上)は何からもたされたのであろうか。1978年度から1979年度にかけて生じた大学そのものの変化の中でこうした環境の変化をもたらしたと考えられるできごとをとりあげてみよう。

まず前述(Ⅲ-A-i)のように、1978年9月に完成した新校舎の増築と旧校舎の塗装等を中心とする学内の校舎の拡充整備が第一の原因として考えられる。それまでの灰色のコンクリートの地肌をむきだしにした暗いイメージの校舎の外見は「工場」とか「倉庫」にみまちがわれるほどであったが、明るくアリコ・ブラウン色にぬりかえられ、また校舎内もすっかり明るく塗装されたことに加えて新校舎の増築は外見のみならず大学内の雰囲気を一変したといつてよいであろう。加えて最新設備のLL教室や視聴覚教室の設置、学生研究室というユニークな学習室を新校舎内に設置したことは心理的にもきわめて大きな好影響を在学生に与えたといつてよいであろう。

次に制度上の改善としては1978年10月に学生医療互助会を設置し学生の厚生面における配慮がなされたことがあげられよう。

さらに1978年から1979年にかけての学生全般の大学に対する態度の向上も環境の改善に寄与したと考えられる。この点は他の大学における資料の参照が必要であろうが、北星学園についてこうしたことが考えられる一つの根拠は1979年の新入生の期待値が1978年よりいっそう高い値となっていることである。第19表は両年度の新入先の期待値を比較したものである。すべての領域にわたり1979年の新入生がはるかに高い値を示している。1979年度の新入生がその前年の新入生よりもこのような高い値を示したのはそれがすべての領域にわたっている故に単なる偶然とは

大学の教育的環境の継続的研究

考えられない。すなわち社会全般の風潮として考えねばならないと思われるからである。

一方大学の教員及び職員の間にも心理的な変化が生じたのではないかと考えられる。すなわち1978年に申請した文学部の二学科（英文学科および社会福祉学科）の定員増（それぞれ50名から100名に）が認可されたこと、及び長年不安定であった財政状況に対する不安が消えたことなどから生じた心理的な安心感が全体に落ちついた雰囲気と、前向きあるいは肯定的な姿勢を生み出したのではないであろうか。こうした雰囲気は測り難いものであるが、学生への教育的環境に関して好影響を与えたことは間違いないといえるであろう。

第 19 表 CUES 領域別得点の1年生の年度別による比較  
— 78年度対79年度

領 域	1978年度1年生		1979年度1年生		t
	N = 217		N = 239		
	M	SD	M	SD	
A 実用性	50.7	17.0	62.2	16.6	7.082***
B 学究性	53.1	19.4	58.6	19.0	3.030**
C 共同性	48.3	17.5	58.7	17.7	4.173***
D 妥当性	61.3	17.9	71.5	18.9	5.809***
E 意識性	53.8	23.1	60.0	21.9	2.846**

\*\*\*:  $P < .001$ , \*\*:  $P < .01$  (両側検定)

さて以上いくつかの考えられる要因を指摘したがこれらの要因は別々に働いたというよりも相補的に働きあい一つの増幅した作用として大学の心理的環境を向上させたと考えられるであろう。あるいは、あまりにもこれまでの環境が劣悪だった故に、物理的、行政的条件が少し好転したことを大袈装に評価しているのかもしれない。いずれにしても1979年の環境がみせかけの心理的環境の向上であったかどうかは1980年度における調査の結果をまっとう判断しなければならないであろう。

#### IV. 結論と考察

本研究の課題についてこれまでの分析に基いて結論を出すとするれば次のようになるであろう。

まず北星学園大学の教育的環境の特性は、第一に妥当性の高いことである。すなわち、個人や団体生活のルールを守り、社会や他人への配慮をする態度がきわめてよい。すなわち自らを律して行動するという大学人らしい行動が行なわれている環境があるということである。第二には他大学に比較して学究性が高いということである。すなわち学問的意欲や関心、教育や研究が熱心に行なわれていると学生にうけとめられていることである。

しかしこれら二つの特性は相対的な状況であって、決して満足すべき高さにあるのではない。たとえば、妥当性についても、授業中の私語や中途退室などはきわめて日常的であり、CUESの項目においてもこの点については約6割が批判的である。また学究性については、多くの教授が決して学生の個々の能力を充分ひきだすのに成功していなし、多くの学生もまた自らすすんで勉学に励んではいない。したがってこの特徴はあくまでも相対的な平均値においてという条件をつけて考えねばならないといえよう。

さて相対的であるとはいえ以上の二つは北星学園大学のよい意味での特徴として考えられるのであるが、逆にマイナス面における特徴として考えられるものとして、共同性においてやや弱いということがあげられよう。立教大学や関西学院大学よりもこの点においてはかなり低くなっている。

それ以外の領域においては本学は平均的であるといえよう。領域得点の結果は立教大学や関西学院大学とほとんど変りがない。

次に大学環境のうけとめかたのちがいについては2年生以上になるとほとんど学年間における差は見出せない。また性や学科のちがい、サークルやクラブ等学生の課外活動への参加の有無も環境認知の差を生みだしてはいない。したがって米国における一般的傾向と同様に環境の認知はそこにおけるものの属性に関わりなくひとしいということがいえよ

## 大学の教育的環境の維持的研究

う。

一方新生は入学する時にきわめて高い期待を抱いて入学をしてることがわかった。すべての領域において過大ともいえる期待をもって入学をしている。こうした高い期待、いわば新生の大学に対する幻想もまた米国における現象と共通している。

さて、本調査は1978年度と1979年の二回にわたる縦年調査であったが、その結果この期間に大学環境の変化は著しいものであったことが判明した。すなわち1979年度においては実用性の大巾な向上を筆頭にすべての側面において環境測定値が1978年度よりはるかに高くなったのである。これまで分析をしてきたあらゆる結果から判断しても1978年から1979年にかけての環境の変化はきわめて大きなものであることはまちがいないといえよう。

以上が本調査を行なった結果判明したことの要約であるが、以下にこの結果についていくつかの点から考察をしてみたい。

まず本調査において最も重要な結果は1978年度から1979年度にかけて大学環境が著しく変わったという認識を在学生在がしているということである。こうした大きな変化が異常であることは立教大学の1972年から1977年までの6年間に一度もそうした変化が生じていないことによっても明らかである。また、ペイスの報告においてもスターンの研究においてもこれほどの変化は報告されていない。フェルドマンとニューカムは1970年にそれまでの米国における学生研究を網羅する労作「大学の学生に与える影響」を著したが、その中で縦年の研究においてもそうした急激な変化を示した例は見当たらない<sup>(17)</sup>。

さまざまな疑問がこりうる。「ほんとうに変化が生じたのか?」。 「調査の方法に問題はなかったのか?」など。たしかに物理的な変化は生じた。しかしそのことがそれほどの大きな影響をもたらすものであるか。

調査の方法については毎回ほとんど同じ方法で行なっているので方法の側面から生ずる誤差は少ないと思われる。しかしほんとうに変化が生じたのかどうか、そのことを学生がどう感じているかについて調査対象となった学生たちにたずねてみた。学生たちの答は概して肯定的であっ

た。特に実用性についてはその向上の著しいことをみとめていた。しかし他の面でそれほどよくなったかどうかについては疑問を表明したのも少なくなかった。

私自身は、調査結果は調査の時点における一つの事実であり、その時点における心理のあらわれであると思うので、この結果については、1978年に行なわれたさまざまなできごと（校舎の増改築や新施設の導入など）がそれほどまでに大きな影響を与えたのかということへの驚ろきは持ったものの、結果の妥当性は高いと思っている。そして1980年に調査を行なえば、その後行なわれた大学の正面入口附近や駐車場を舗装したこと、また庭園整備などによりキャンパスの美観が増したことによりさらに実用性は高くなるであろうし、他の側面もすくなくとも本年と同じレベルを維持するのではないかと思っている。

わが国の教育は伝統的には精神主義が大きな要素を占めてきたと思う。そして今日でもその傾向は続いている。校舎が貧弱であり、設備が粗末であっても、やる気があればやれるんだ、といった見解が支持を得やすい。そして、条件のわるいところで苦勞をして成功をする事例を美談としてとりあげる傾向がある。たしかにそれは美談にちがいない。しかし、それを美談にすることから貧しい施設や校舎を肯定し、むしろその方がよいのだという倒錯した精神主義を肯定してはならないと思う。さらに精神主義を成功させるための条件は、はたして校舎の貧しさなのだろうか。それは実のところほとんどの場合、精神的指導者の存在によっているのではなからうか。北星学園大学の場合、環境に対して学生が急激に好感をもつようになったのは他ではない、それまでが悪条件すぎたと考えるべきであろう。

大学とはその構成員が自主性をもち主体的に勉学をし研究にはげむべきところであるとするならば、本学における妥当性の高さと、諸環境要因の向上はのぞましいことであり、よろこばしいことである。この事実をまず認識し、さらにこうした方向を助長し、そこに学ぶものが自ら学ぶ姿勢をもたざるを得なくするような環境をつくっていくように努力することが、大学教育に関わるものひとりひとりの責務ではないだろうか。

## 大学の教育的環境の継時的研究

### 註

- (1) 日本においては大学行政 (college administration) という用語はあまり馴染まないで、通常は大学管理運営あるいは大学経営という用語が用いられているが、いずれも教育的意味が含まれていない感じがすることばであるのであえて大学行政ということばを用いた。
- (2) Walsh, W. Bruce: *Theories of Person-Environment Interaction: Implications for the College Student*, The American College Testing Program, 1973, pp. 2-8.
- (3) Pace, Robert: *College and University Environment Scales*, Educational Testing Service, 1967, p. 2.
- (4) Stern, George G.: *People in Context*, John Wiley and Sons, Inc., 1970.
- (5) Pace, Robert: *Op. cit.*, pp. 14-27.
- (6) Feldman, Kenneth A. and Newcomb, Theodore: *The Impact of College on Students*. Jossey-Bass, 1970, pp. 231-236.
- (7) Walsh, W. Bruce, *Op. cit.*, p. 63-92.
- (8) *Ibid.*, pp. 157-169.
- (9) 立教大学学生相談所・学生部, 「大学環境調査報告書」昭和47年度在籍学生, 1973.
- (10) 立教大学学生相談所・学生部, 「大学環境調査報告書」昭和49年度在籍学生, 1975.  
以下同じように昭和50年度および昭和52年度学生の報告書がそれぞれ1976年および1978年に発行されている。
- (11) 関西学院大学総合教育研究室, 「われわれの大学をよりよく理解するために — カレッジ・コミュニティ調査第一次報告書 —」, 1977年。
- (12) 立教大学版はベースの原文のうち日本に適用できるものだけを残し、他は日本の大学の現状にあうように工夫されてつくられた。
- (13) Pace, Robert: *Op. cit.*, pp. 18-27.
- (14) 立教大学学生部, 「学生部通信」, 第51号, 1978, p. 3.
- (15) Stern, George G.: *Op. cit.*, p. 92.
- (16) 1979年においては調査時の手違いから性別の属性について資料を蒐集することができなかった。調査実施者の不注意による失敗であった。
- (17) Feldman, K. and Newcomb, T.: *Op. cit.*

# A Longitudinal Study on College Environment at Hokusei Gakuen during the Period of 1977 and 1979

by Nobuo DOBASHI

From December 1977 to April 1979, College and University Environment Scales (CUES) were administered five times to 867 freshmen through senior students who were enrolled in teacher education courses at Hokusei Gakuen College. The CUES consists of five Scales (Practicality, Scholarship, Community, Propriety and Awareness), each of which is composed of 20 items. They were developed by Robert Pace in 1963 and have been widely used in college environmental studies in the United States. Rikkyo University in Tokyo developed the Japanese edition in 1972 and administered it to students in 1972, 1974, 1975 and 1977. Kansei Gakuin University also administered CUES in 1976.

Various analyses, such as analyses of variance, t-tests, and item analyses were conducted on the results. The analyses revealed that students at Hokusei scored much higher in the Scale of Propriety and Scholarship than those at Rikkyo and Kansei Gakuin. A distinguished finding was that five Scales were significantly higher in 1979 as compared to the scores in 1977 and in 1978. This means that the environment has changed conspicuously during the period between 1977 and 1979. Such a remarkable change is unusual and has not been reported by any other colleges. It seems that a series of improvements such as renovation of the main building, building a new language laboratory, classrooms and student study rooms, and official expansion of the capacity of enrollment for admissions, certainly



changed the atmosphere of the college environment, which must have resulted in a higher assessment by the students in 1979.